大学生の死生観におよぼす過剰適応の影響
— 過剰適応の2側面と本来感の関係に着目して —

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
石原 颯子

問題が顕在化しにくく、本来感の低下と関連のある過剰適応は、否定的な死生観を引き起こし、自殺の危険に晒されている危険性がある。しかし、過剰適応と死生観の因果関係についての研究はほとんどない。

本研究は、大学生を対象に、過剰適応、とりわけ内的過剰適応と本来感がどのような関係性を持つのか尺度から検討し、過剰適応と死生観の因果関係を明らかにすることを目的とする。

大学生を対象に質問紙調査を行い、回答に欠陥や不備があった回答者を除き最終的に573名が有効回答者となった。

内的過剰適応と本来感の関係性は因子分析によって、内的過剰適応と本来感が同等のものであるということが証明された。さらに、重回帰分析によって解析した外的過剰適応・内的過剰適応から死生観のパスに、本来感を投入したところ、投入前よりも、説明率が向上した。内的過剰適応に本来感を加えた上で、外的過剰適応・内的過剰適応と死生観の因果関係を共分散構造分析によって明らかにした。結果は因果関係が認められ、外的過剰適応は、死への恐怖・不安・回避、死後の世界観、人生における目的意識、死への関心に正の影響を与えていた。一方、内的過剰適応は、解放としての死に正の影響を与え、死後の世界観、人生における目的意識に負の影響を与えていた。

このことから、過剰適応は否定的な死生観を引き起こし、自殺を引き起こすことが示唆され、早急な支援が求められていることが考えられる。